

演題・抄録

・欠損補綴の目的から考える 機能させるパーシャルデンチャー・オーバーデンチャー

奥森健史

日常臨床では、多くの割合で機能の回復、審美性に改善を目的とした補綴治療を必要とされています。欠損補綴においても、可撤性装置であるパーシャルデンチャーやインプラントを含むオーバーデンチャーも重要なオプションではないでしょうか。換言すれば欠損部に対し口腔模倣を原則とした咀嚼ユニット{人工歯・義歯床からなる部分、または、上部構造体}をいかに適正なポジションに回復し、それらの生理的機能を担保とした“力”に対し口腔内にてどう維持・安定させるかが勘所となります。患者可撤性装置、術者可撤性装置、いずれにせよ上下顎の欠損状態からアイヒナーの分類や“咬合支持指数”などで補綴治療終了後にその予後のリスクも予測し再介入時の“次の一手”を考えておくことも必要ではないでしょうか。そこで、今回は、欠損歯列における“支台装置への力学的考察”と“咀嚼ユニットの動きをコントロール”部分をターゲットに絞って考察したい。口腔模倣において、歯を復元させるプロセスには、“色”“形態”という目に見える部分と、それらが歯列として、一体化しそこへ加わる機能的考察すなわち目には見えない“力”という部分をどうコントロールするのか、ラボサイドにおいてもその部分を押さえて日常臨床に生かせれば、高い水準でチェアーサイドとのコラボレーションにつながるのではないのでしょうか

奥森健史